

乃木希典と静子と聞いても、若い世代は首をかしげる人が大半かもしれない。

希典は陸軍大將で、日露戦争最大の激戦・旅順要塞攻略戦を勝利に導いた。

そして102年前、夫婦は明治天皇の崩御に際して、そろって殉死を遂げたのである。

希典はペリー来航の4年前、江戸の長府毛利家屋敷で生まれている。父・希次は下級武士で、希典を厳格に育てた。10歳で故郷に戻り、縁続きの玉木文之進（吉田松陰の叔父）宅に寄宿して藩校を出た。

18歳だった第二次長州征討（1866年）では、報国隊の一員として戦闘に加わってい経験から陸軍入りした。

18歳だった第一次長州征討（1866年）では、報国隊の一員として戦闘に加わってい経る。指揮官は山県有朋で、この

かう途中、西郷軍に襲われて軍旗を奪われる事件が起きた。处罚こそされなかつたが、希典は自責の念にさいなまれ、殉死の理由にもつながっていく。

2人は翌明治11（1878）

年8月に結婚した。希典は30歳になつており、連夜の料亭通いと深酒を心配した母・寿子が「とにかく身を固めて」と強く勧めて実現した。

静子は旧薩摩藩医、湯地定之の娘で、東京・麹町女学校に通つた教養を備えた女性だつた。

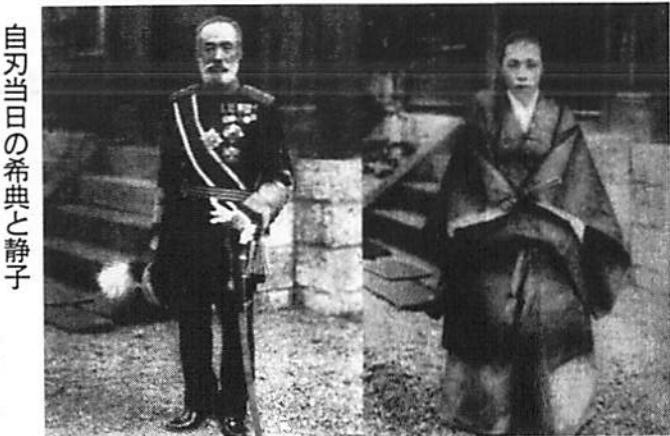
数えの20歳で乃木家に入り、姑・寿子との折り合いに悩みつつ、3男1女を産んでいる（1



乃木希典（1849～1912年）



静子（1859～1912年）



自刃当日の希典と静子
(東京・乃木神社のパンフレット)

◎もっと知りたい 夫妻に関しては、膨大な研究の蓄積がある。「軍神・乃木」の虚飾が払われた戦後の成果として、松下芳男著『乃木希典』（吉川弘文館）や大濱徹也著『同』（講談社学術文庫）、佐々木英昭著『同』（ミネルヴァ書房）などが入手しやすい。小説だが、渡辺淳一著『静寂の声』（文芸春秋）は諸資料にあたり読みやすい。

人前で息子の戦死を悲しむことなどできなかつたのだ。
職務においても、ひたすら廉直だつた。古武士のようなその生き方は多くの国民の心を打ち、明治天皇もこれを愛した。しかし一方、「精神主義に逃避した愚将」とする厳しい見方も

刃したのだった。
部屋には夫婦自筆の辞世などとともに、静子にあてた遺書もあった。最初は希典だけが自決する計画だつたと考えるしかない。夫は天皇に殉じ、妻は夫に殉じたのであろうか。

日露戦「戦勝将軍」の家庭と自決

乃木一家の家風は、希典がすべてを決め、静子と息子（勝典、保典）は絶対服従だった。希典の家族への愛情が薄いわけではなかつたが、それを表現する術を持たなかつた。

勝典、保典はともに陸軍士官となり、旅順戦で戦死してしまった。屋敷に祖先神をまつる祠を設けるなど、家門繁栄を願つていた希典が気落ちしなかつたわけはない。しかし、旅順で6万の将兵を死傷させた将軍には、

乃木一家の家風は、希典がすべてを決め、静子と息子（勝典、保典）は絶対服従だった。希典の家族への愛情が薄いわけではなかつたが、それを表現する術を持たなかつた。

男1女は早世）。
凱旋した希典は学習院院長となり、伯爵に列する栄誉を得た。しかし、暮らしぶりは変わらず質素だった。生活に困窮した軍人遺族に金を送ったり、貧しい学生に学費を提供したり、台所は常に苦しかつた。

明治45（1912）年7月30日、天皇が61年の生涯を閉じた。希典はささき込むようになり、身辺整理を始めた。9月13日午後8時、御大葬の葬列が皇居を出る時間、夫妻は自室で自

夫婦の日本史

渡部裕明

男1女は早世）。

乃木一家の家風は、希典がすべてを決め、静子と息子（勝

典、保典）は絶対服従だった。希典の家族への愛情が薄いわけではなかつたが、それを表現す

る術を持たなかつた。